

浄土

1989-11

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雑誌) 第三二五号
平成元年十月二十五日印刷 平成元年十一月一日発行
第五十五卷 十一月号





十一月の秀句

干柿の粉を吹く風の北となる

梅田久子

初鴨にふるさと人の声透る

石原八束

冬を待つ用意かしこし四疊半

正岡子規

十一月号



一向の信を致して、その門に入る
人、きわめてありがたし。

——『念仏大意』

目 次

——特別寄稿——

浄土教は方便教か……………須 藤 隆 仙……(2)

十夜会法話……………佐 藤 晴 輝……(20)

◇特別連載◇

両絵の在阿〔二〕……………山 本 恭 雄……(14)

<読者の便り>

正村師の一文に感激!!……………築 地 泰 賢……(29)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <32>

海と山の狭間で

……………木 下 隆 一 ……(30)

——我が思い出に住む犬たち(18)——

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(11)

……………松 浦 行 真……(38)

——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

浄土教は方便教か

須^す藤^{どう}隆^{りゆう}仙^{せん}

(函館市称名寺住職)



はじめに

ある檀家の方から、「浄土宗は方便教なの
でしょうか」と真剣な面持ちで聞かれ、一瞬
ギクッとしたものでした。というのは、最近
そういうことを言いふらして歩く某教団があ
ると聞いていたからです。

現にこの檀家の人も、「ある人からそういわ
れ、そういう方便の教えを信じていてもご利
益がない」ともいわれたといっておりました。
以下、私が答えたものを整理加筆して、述
べてみる次第です。

方便の意味

まず、そういった質問の形そのものがすでに間違っていることであります。

何が間違っているかというところ、「方便」ということの解釈の仕方が間違っている。だから右のような疑問が出てくるわけであります。

この方々は「方便」という語を、「うそ。まやかし」というふうに考えているのです。大変に悪いものだと思っている。それは世間に「うそも方便」といった言葉があるからです。

広沢虎造の有名な浪曲・清水次郎長伝に、森の石松が讃岐の金毘羅様へ代参に行くくだりがある。この時、次郎長は石松に、「おまえは酒癖が悪いから、行って来るまで酒を断て」という。すると石松は「たとい親分の命令でも、酒だけは止められない」といい張り、

親分と子分の言い争いになる。このとき小政が仲裁に入り、石松を隣の部屋へつれていて、「石松、おまえは馬鹿だ。親分にはへえ飲みませんと、そをついて出て行って、途中でドンドン飲めばいいではないか」と悪知恵をつけ、「うそも方便、所によつては宝となる。お釈迦様のいったうそが、方便といつて宝になった」というくだりがあります。

世間ではどうやら「方便」ということをこの程度に解釈していて、「うそ。まやかし」のことだと思っている人が多いようであります。

これは間違いでありまして、「方便」とは「うそ。まやかし」のことではないのであります。一般の辞典類などにどう説明されているかというに、つぎのとおりです。

「①衆生を教え導く巧みな手段。真実の教法に誘い入れるために仮に設けた教え。②目的のために利用する便宜の手段。てだて」(『広辞苑』)

「①仏語。仏教で、下根げこんの衆生を真の教えに導くために用いる便宜的な手段。またその手段を用いること。②とくに密教では、自利と利他、向上と向下の両義にとり、自利利他の実践を完成することとする。③目的のために利用される一時の手段。またその手段を用いること。てだて。たばかり。計略」(小学館『日本国語大辞典』)

「①ある目的を達するため便宜的に用いられる手段。てだて。②仏が衆生を教化救済するために用いるさまざまな方法。真実の教えに至る前手段として教化される側の、

宗教的能力に応じて説かれた教え」(『大辞

林』)

これらを見ると、方便の語は仏教語であつて、意味は「手段。手だて」のことであるが、俗意には、「たばかり。計略」といった悪い意味で解釈されているのも事実であります。(たばかりとか計略とは、人をだますためのはかりごとをいう。)

仏教の専門の辞典には、いろいろと面倒な説明がありますが、解り易い中村元先生の『仏教語大辞典』には、つぎのようにあります。

「①方法。てだて。巧みなてだて。便宜な手段。工夫。巧みなはかりごとを設けること。巧みになされたはかりごと。すぐれた教化方法としても用いられる。真実に裏づけられ、また真実の世界へ導くてだて。衆

生利益のための手段。差別の事象を知って衆生を済度する知慧。はぐくみ。真実の教えに導くために仮に設けた法門のこと。すぐれた教化方法。仮のてだて。衆生を救済し、さとりに導くための一時のてだてとして説かれた教え。他をしてさとらしめるための手段。②十波羅蜜の第七。③真実を証するために修行すること。加行。④くわだて。事業。発起して努めること。⑤しかた。譬喩の立てかた。⑥努力のこと。⑦柔軟な心がまえ。⑧行く道の手段」

す。

こうして見てきますと、「方便」という語の第一義的な意味は、「すぐれた教化方法としての手だて」なのであって、本来的には決

して悪い意味ではないわけであります。

ですから仏教では、どの宗の教えでも、この「方便」ということを非常に重要にあつかうのであって、『法華経』などでもわざわざ『方便品』という一編があるほどであります。『無量寿経』にも「善く方便を立てて三乗を顯示し」といったふうに、すぐれた教化方法として説かれております。

四十八願と方便

さて、こうなってきますと、「浄土宗は方便教か」という質問の基本が間違っていたことがよく分ります。まず「方便」の語は悪い意味ではなく、非常に善い意味のものである。だから悪いものと考えてこの質問は基本から間違っているわけであります。

そして、この「方便」の真の意味が解りますと、今度は、「浄土宗は手だて（方便）の教えですか」という質問の形の間違いがよく分ってきます。つまり方便は「手だて」なのですから本当なら「浄土宗の教えの中には、どういう方便が見られますか」という質問にならなければならぬわけであります。

そこで問題をそちらの方へ移しますと、仏教大学仏教文化研究所編『新浄土宗辞典』に、「善巧方便」として、つぎのように記るされております。

「菩薩が衆生を度するにあたっては機宜に應じて自由自在に施設教化する巧妙な智用をいう（中略）菩薩の善巧方便の代表的なものとして法蔵菩薩の四十八の大誓願がある」

浄土教では、法蔵菩薩が長い長い時間をかけられて衆生救済の方法をお考えになられ、そのすえ、四十八の誓願を立てられ、それを成しとげられて阿弥陀仏に成られたと教えるわけですが、その法蔵菩薩の四十八の大誓願こそ、方便の代表的なものだというのであります。

ただこれは、まことにその通りなのでありますが、書かれた先生は専門家ですから、すっかり分っておられ、サラリと書いておられるかけであります。素人さん（といつては失礼ですが、専門家以外の一般の方）が見ると、ちょっと誤解し易い記述だと思ふのであります。どう誤解し易いかというと、四十八願そのものが、巧妙に施設された方便として解釈され易い。つまり、四十八願の「存在」その

ものが方便であると誤解されるわけであり
ます。

四十八願というのは、「存在」そのものが
方便なのではなく、「説き方、示し方」つま
り「構造」として方便なのであって、ここ
のところをちょっと説明しておく必要があ
ったと思われるわけであります。

存在と構造

四十八願の「存在」が方便ではない、とい
う意味はといいますと、四十八願は真実そ
のもの、真の實在、真實在なわけであり
ます。現代の人に分り易くいいますと、そ
れは大自然の中に実在する「育ての力」
であります。大自然といってもいいし、
全宇宙といってもいいでしょうが、そこ
では、ものが壊われて

もいつておりますが、つぎからつぎと育
てられてもいつてゐるわけでありま
す。むしろ、よく観察してみますと、
壊られるのも育ての働きの中の一環
であることが分るのであります。

この「育てのみ力」に目覚めるのが
お念仏であります。阿弥陀仏の大慈
悲（四十八願）というのは、全宇宙
の育てのみ力であります。鈴木大拙
博士は大谷大学の学生に、つぎの
ように話されたといひます。

「諸君には、阿弥陀仏のお慈悲によ
つて救われと言っても素直に信ずるこ
とはできないであらうが、宇宙には
すべてのものを救済しようとする宇
宙的な意志があると言つたならば、
諸君は「そうか」と言つて頷くであ
らう。阿弥陀仏の本願というものは、

そのような宇宙的な救済の意志とでも言うべきものであって、それが本願であり、本願が先にあって、後から阿弥陀仏というものが出て来たのである」（『中外日報』）

まことにその通りであります。法然上人様は、なればこそ、阿弥陀仏の本願と来迎を、法爾の道理（宇宙大自然の真理）とご教示下されたのであります。つぎの通りです。

「法爾の道理と言う事あり。炎は空にのぼり、水は降りさまに流る。果子（果物）の中に酸き物あり甘き物あり。これらはみな法爾の道理なり。阿弥陀仏の本願は、名号をもて罪惡の衆生をみちびかんと誓い給いたれば、ただ一向に念仏だに申せば、仏の来迎は法爾の道理にて疑いなし」（『念仏問答集』）

このようなわけですから、四十八願の存在を方便と見ては大間違いであります。四十八願は真実在そのものであります。

では、「構造」として方便である、というのはどういうわけかという、四十八願の構造は、これこそ見事な、手だて、手段であつて、まさに方便そのものであります。それはつぎの通りです。

四十八願の形というのは、初めに「設し我仏を得たらんに」（設我得仏）という言葉で始まり、終りが「正覚をとらじ」（不取正覚）となつてゐるわけであります。そしてその中間に「○○のようにならなければ」といった言葉があつて、それが四十八あるわけであります。例えば、

「設し我仏を得たらんに、国に地獄・餓鬼

・畜生あらば正覚を取らじ」(第一願)

とあって、「もし自分が仏になったならば、私のつくった国の中に、地獄や餓鬼や畜生のような苦しい境遇があったならば、自分は仏になりません」という誓願であります。

これはちょっと見れば、何でもない言葉のようではありますが、よくよく考えてみると、じつに巧みな説き明かしなのであります。それこそ善巧方便であります。というのは、阿弥陀仏とは、三身即一とか実証万徳の如来といわれるように、十劫の昔に成仏されたというもののそれは浮き出た表面のお姿であって、じつは永遠の昔からの仏なのであって、法蔵菩薩というのも本体は阿弥陀仏(無量寿如来)であるわけです。つまり本来的な阿弥陀仏が法蔵菩薩と現われて、永い思索のすえ四

十八の大願を立てられ、その願を全部成しとげられて報身の阿弥陀仏として凡夫の救済主となられたわけでありますから、「設し我仏を得たらんに」といい「正覚をとらじ」といわれても、それはいわば人々を信仰へ導くための手段なのであって、すでに願が成就しているのに、成就していかないような格好をして、「設し我仏を得たらんに」とか「正覚をとらじ」とかいっておられるわけであります。その構え方が、これこそ、手だて、方便なのであります。この意味で「方便」なわけですから、それは「実在」に関するものではなく、「構造」について方便といい得るわけであり

ます。

浄土宗では、右の永遠の昔からの本来的阿弥陀仏を、直ぐさま正面に立てず、正面はあ

くまでも十劫正覚（成仏）の仏といたします。これは本来的阿弥陀仏（久遠実成の阿弥陀仏という）を立てて、そのために一念仏がおろそかになったり、自分は阿弥陀仏と同等だなどという自惚（うぶほれ）をもったりすると困るので、それでそのように（十劫正覚）教えているわけですが、しかし、だからといって、三身即一、久遠実成が消えるわけでは勿論ありません。

真宗の方ではこの点を少しゆるく考えまして、親鸞聖人は「弥陀成仏のこのかたは、いまに十劫と説きたれど、塵点久遠劫よりも久しき仏と見え給う」（『浄土和讃』）といい、また「久遠実成阿弥陀仏」（『弥陀和讃』）とはつきりいつておられます。親鸞聖人とて法然上人から『選択集』を頂戴し、真剣に念仏を称えられたお方なので、私たちはこのよ

うな他流の方々の教えも謙虚に聴かなければならないと思います。

法然上人の教え

とくに私は、前々から真宗存覚上人の言葉で、つぎのものを大変感銘しておりましたので、左に記します。

「阿弥陀如来は三世諸仏に念ぜられ給う覚体なれば、久遠実成の古仏なれども、十劫已来の成道を唱え給いしは果後の方便なり」（『浄土真要鈔』）

即ち、阿弥陀仏はもともと久遠実成の仏なのだが、方便として十劫正覚と示しておられるのだ、というのであります。これはじつに重要なご教示だと思います。

十劫ということにつきましても、教義の上

でいろいろと面倒なことがいわれるのですが、ここでは省きます。

以上、要するに、阿弥陀仏についても、四十八願についても、浄土についても、これが「實在」論として方便だと見ては間違いとなりましょう。これらはすべて宇宙の育ての力に根ざしたものののですから、方便ではなくて真実そのものであります。

しかし、「構造」論の上で方便ということがいえるのでありまして、無存在のものを有るように説いたのではなく、真實在を巧みな構造で教示した教相なのであります。

重ねていうと、方便ということは、「實在」論上にいうものではなく、「構造」論上にいうもののであります。このところをよくよく信知すれば、左の法然上人のお言葉が非

常に有難く頂戴できるのであり、それを掲げさせて頂いて、結びといたします。

「酬因感果しゅういんかんくわのことわりを大慈大悲の御心のうちに思惟して、年序そらにつもりて、星霜五劫におよべり。かくの如く善巧方便をめぐらして、思惟し給わく。われ別願をもて浄土に居こして、薄地底下はくじていげの衆生を引導すべし。その衆生のおれが業力によりて、生まるとは言い難がたかるべし。われ須すからく衆生のために、永劫の修行をおくり、僧祇そうぎの苦行をめぐらして、万行万善の果徳円満し、自覚覚他の覚行窮満して、その成就せんところの万徳無漏の一切の功德をもて、わが名号として、衆生に称なづえしめん。衆生もしこれに於て、信をいたして称念せば、わが願にこたえて生まるることを得べし。

名号を称えれば生まるべき別願を起して、その願成就せば仏になるべきが故なり。この願もし満足せずば、永劫を経るともわれ正覚をとらじ」(『登山状』)

一般の方々にお解りいただけるように意識しておきます。

「(阿弥陀仏、この段階では法蔵菩薩は)善行によつて善果を得る道理を、凡夫の救済に活用しようと考え、その方法を考案するのに、五劫という永い永い年数を費やされた。

その結果、非常に優れた手だてを用意され、つぎのように誓われた。

「自分は特別の悲願をもつて仏界(浄土)に住し、どのような劣った凡夫でも必ず導いてやる。それには、人々は自身の力で歩むべきだといったならば、それは難しい問題

となるであろう。だから自分(法蔵菩薩)は、自分で優れた修行をして大変な功德を身に付け、その功德を阿弥陀仏という名前にして人々に称えさせよう。人々がほんとうに真剣に称えたならば、自分の悲願は必ずこの人たちを浄土へ生まれさせるであろう。

名前を称えれば生まれさせてやるよという特別な願をちゃんと用意しているのであり、その願が成就すれば自分はほんとうに阿弥陀仏に成るのだから、これは即ち交換条件であつて、空手形にはなり得ないわけである。自分もまたこの願を実現できない場合には、いつまでも仏に成らないのである」
精読するほどに有難いお言葉であり、善巧方便ということが、まことによく分るのであります。

(了)

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十五巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

◆◆◆ 特別連載 ◆◆◆

両総の在阿〔二〕



良忠の前に幾度かの礼を重ねて、在阿は心豊かに上総に戻った。

もう水仙も梅も咲きはじめている。
房総の春は早い。

上総の山からは、富士の山がくっきりと見えたと。
在阿は西の空に向かって手を合わせた。

市宿の草庵に籠った在阿は、以来念仏三昧

やまもと きょうゆう
山本 恭雄

(木更津市選択寺住職)

の日々を過した。

村人が訪ねてくると、笑顔で人々に仏の教え、念仏の法門を易しく説いて聞かせ、共に念仏を唱えた。

次第に村人に在阿は心から慕われるようになり、生き仏のように多くの人々から敬まれ拜まれるようになった。

しかしながら、正嘉二年（二七八）五月二十九日、在阿弥陀仏、在阿は遂に西方の蓮台上に住生せられた。

それは良忠にめぐり会って一年余のことであつた。

村人は皆草庵に集つた。

正に釈尊の涅槃を思わせるようであつた。

村人の念仏の声は、鹿野山の麓にこだました。

人々によって在阿は手厚く草庵近くの山中に葬られたのであつた。

以来村人は野花を手折っては、東阿の墓に詣でては念仏を唱え、在阿さまと慕いつづけたのである。

今日も尚、人々の唱える在阿法師仏詠歌、

ありがたや松のみどりの千代の春

如来のよりきいつもたやせぬ

の声は、墓前にひびいているのである。

清和村誌に、

在阿法師堂

秋元村市宿字岩室の山腹にあり

面積十二坪許、墓石一基あり

伝え言う在阿法師建長中市宿に來り

三經寺を開き示寂して此処に葬る

享保十五年庚戌鎌倉光明寺の僧

義譽其遺跡を訪ふ

此時在阿石既に失せて唯在阿松と

称するもの存するのみ

義譽即ち松下に墓石を建てしと

今来りて弔すもの絶えず

と記されている。

享保十五年（一七三〇）時の住職は、その墓

碑に次のように刻んでいる。

在阿法師原台宗学侶一時捨置舊業慣練西

生安心棲心於鎮西尊者念仏授手印而以有

其所疑致問於記主禪師時禪師親採毫示其

溫奥消积疑泳爾来法雨遙潤遐代也蓋夫法

師之請問啓發大道其功実為偉也與因波毘

提哀請広開浄土門異車同轍者也雖然歲月

経久示寂之遺蹤世知人希仍而建碑墓上記

其切烈伝

享保十五庚戌歳十月十日

仏法山補陀洛院三經寺第十一世

戴蓮社運譽隆岩

とあり、また特に先の義譽大和尚の鑽仰にふれて、

相州天照山主義譽大和尚嘗追尋在阿法師

之芳躅享保十五年春来拝法師古墳之因勸

誘郷里之道俗授與日課念仏大凡從其化者

殆二千人也利潤之盛大寔不可言也越和尚

以享保辛亥臘月十有八日示寂于天照也時

州郡授化之士女欽慕和尚之道風建塔於此

地永為擅余感其深信敬誌之意趣云

享保十七年壬子三月十八日

と記されている。

今に伝えられる在阿法師古松墳墓記に、

上総国周東郡（周東は古記にしたかふ今周准郡なり）市宿村三経寺に属する林丘の中に独秀たる数拱の松あり 是建長の頃此所に棲れる在阿法師といへる学匠の墓なり

師始は四明の教観をもて三諦の宝玉をみかかれしかとも重き病をうけて露命のきえやすきを悟り宿縁や催しけん 秀修の学処を改て住生極楽を願はれしに円光大師の滅后異儀蘭菊の津口に人を待つをりたまたま聖光上人の授手印鈔を見て修行の正軌を憚へとも更に口授を闕か故に輒く理義に通せず仍て臨来の仏勅に準し所々に有識の門戸を敲いて其義を尋るに齟齬云々として亦ひとしからず 唯然阿上人は聖光上人の真統なりと世にかくれなく云あへり 其頃禪師

は下総の鎬木 福岡、海上などに浄法弘通し在しけるか夫禪室に趣き授手印鈔を捧けて明決を清れしに重々の疑氷立地に脉久たる法流聊滞りなく聞かれなければ在阿も専修仏名の門に入て決定の信をおこされき

誠に法師の疑問は末代蔡塞をひらき決答の眼々なることは三辰の夫につけるか如く是相乎相応して数る者の倡首たれか之仰ざらんや 今総の両国に宗門の学生分衛住復すること多し 国人之をみると天倫の兄弟にひとしく外護せらるるは皆良忠上人 在阿の余光といひつへし しかるに在阿の遺跡は此松にのみ駐てありつらん 碑も失われたれば記主禪師は上総周東在在阿弥陀仏者誌し白旗上人は周東周西は一郡の分てるとの言葉あれば法師の宝此去て又何所をと

ははむ且周准の東に陳迹の相似たるものなし
さいわい在阿松とよへる名の下豈空からむや云々

と享保十六年に記されている。

また明治十五年壬午年二月二十四、日在阿法師六百二十五年忌供養が行われ、墓地修復記念碑が建てられ、大導師として生実大蔵寺石井実禪、鎌倉光明寺吉水大信、また守永寺杉原順昇、正源寺千葉龍天、他選択寺等々の衆僧の随喜で盛大に奉修された。

その時の供養施主芳名簿序に、

在阿法師は上総周東の生にして天台宗の碩学なり 深く浄土易行住生の宗意を信じ建長の始め鎌倉の記主禪師に帰して其奥義を開き末世澆季の凡夫念仏にあらされば住生遂けがたきを悟り化導遠近に遍く道俗是

に帰する者水の低きに就くか如く其益を蒙らざる者なしと云 生縁の帰する所終に周東市宿村古丹堀の山中に來り一つの草庵を結び住生の素懷を遂けられしは実に正嘉二年なり

浄土宗の後世盛なる法師の力むる多しとす其後五百年を経て鎌倉光明寺義譽上人其頃都鄙に隠れなき碩徳なりしか深く法師の法躰を慕い來拜ありて其道徳を唱え近郷の人民を勧誘し日課念仏を後世に伝へ給う其法像信仰の村名今に其碑に顯然たり 明治七年社寺一般上地の際此山林を官林となりしも同十四年本寺大蔵寺住職石井実禪上人及三經住僧星野学定檀家世話人より庁に懇願して官其道徳に許し元の如く該寺の所有に歸さしめ玉ふも実に無遮の聖恩なりとす

るは之をまたすと雖も 又法師道德の余慶
にあらざるを保んや 依て聊か其功德を述
へて結像の諸人に告ぐという尔

と記されており、時を経て、法師追慕と尊
崇は今日に受けつかれているのである。

時流れて昭和三十二年、三経寺二十五世井
村諦賢、在阿法師七百遠忌報恩塔を建立し、
改めて昭和三十四年五月二十九日在阿法師七
百年遠忌法要が大導師光明寺大野法道台下の
宣疏、浄土宗管長神居琳応猊下の嘆徳疏を拜
奉して随喜寺院七十二名、村民列をなし快晴
無風裡に修了したのであった。

誠に法師の広大なるご遺徳を仰ぎ、合掌称
仏の声山谷に響きわたったのである。

(つづく)

(好)
(評)

『仏事と信仰生活・浄土宗』

宮林雄彦編

四六判 一四四ページ

定価八〇〇円(二二〇〇円)

◎浄土宗の檀信徒には必携の書!!

平明な記述と豊富なイラストによるあ
かるい装丁の本!!

△発行▽

図書出版 群書

〒170 東京都豊島区巢鴨四一七一六―四〇三

TEL (〇三) 九一七―八四一一

(振替) 東京七一六八七五九

十夜会法話

○ 十夜会縁起

『無量寿経』というお経に、

「ここに於て善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土に於て善をなすこと千歳するに勝れたり」

とあります。

つまりこの現世に於て行う一日一夜の善事は阿弥陀仏の極楽浄土で行う百年の善事にも勝れ、一粒万倍の功德があるということです。

佐 藤 晴 輝

(木更津市正行寺住職)

お十夜はこの『無量寿経』に由来するところで、その縁起については、天台宗第三代慈覚大師円仁が中国に渡り、浄土教の經典並びに「引声阿弥陀経」を我が国に伝えた(引声とは極楽の八功德池の波の音を現わしたもの)。慈覚大師は阿弥陀如来をお慕いし、その尊容を顯わそうとして、志賀の里「苗鹿明神」の神木をもつて拝みぬいて、尊像を一体きざみまつたという。そうしたところ、三夜大師が夢枕に立たれ、

「我れ衆生済度の為、京の街へ下りたし」と告げられ、それよりこの尊像を東山の麓、真如堂に安置したという。

我が国におけるお十夜の起源は、今からおよそ五百五十年前の室町時代末期に、平貞国がこの真如堂に於て「十日十夜」の念仏修行を行ったことにはじまる。

京都吉田山の『真如堂縁起』によると、後花園天皇の永享年中（一四二九～一四四一・足利義教^{よしかど}將軍の時）、平貞国が真如堂にこもって三日三晩の念仏を修行した。貞国は若き頃より念仏生活にいそしんでいたが、肉親関係の不和からこの世の無常を痛感し、出家の志を定めて、真如堂の慈覺大師作の一刀三礼の阿弥陀如来像のもとに参籠して別時念仏を勤めた。そして満願の夜の明け方に瑞夢を感じ、

心だに立てし誓いに叶いなば

世の営みはとにもかくにも

という歌を夢の中で告げられた。

「念仏修行さえ怠りなく申されるなら、出家しようとしまいと変りはないのである」という意味で、貞国はこの靈夢に剃髪を思いとどまり、家督を相続して執權職となり家門は繁栄の一途をたどった。そして真如堂へ報恩感謝の意味から再び七日七夜参籠し、都合「十日十夜」の念仏を修したという。

これより以後毎年、真如堂に於て十月満月前の十日間、比叡山常行堂に伝わる引声念仏の作法に依って念仏修行が行われ、貴賤道俗が参会して十日十夜の法要が盛大に修せられるようになった。

その真如堂に十夜法要が起ってからおよそ

六十年後、後土御門天皇の明応四年（二四九五）鎌倉光明寺第八世観誓祐崇上人が宮中に招かれて導師となり、古式による引声念仏の十夜法要を修された。この時天皇は大変感激され、

「引声の弥陀経は希代の勝事なり」

とお賞めのお言葉を賜わった。それから特に勅許を得て関東光明寺に於てもこの十夜法要が行われることになり、次第に全国の浄土宗寺院へと十夜法要が伝え広められていった。

○ お十夜のころ

もともとは陰暦の十月五日の夜から十五日の朝まで「十日十夜」にわたって勤められたこの法会も、今日ではその期間も十日から五日、三日、あるいは一日と短縮されてきてい

るのが現実です。

しかし、たとえ一日一夜の法要であっても多忙な毎日追われている現代人にとっては大変意義深いことで、特に関東においては、

鎌倉光明寺の双盤十夜

鴻巣勝願寺の塔婆十夜

八王子大善寺の諷誦文十夜

が知られ、各々特色をもって現代に受け継がれています。

さて地方により十夜法要のあり方はさまざまですが、その心は共通するところです。

今ここにその要点をあげると、

(一) 阿弥陀如来への報恩念仏

(二) 先祖・先亡への念仏供養

(三) 天地の恵みに対する感謝の念仏

という三点であると思います。

このことは釈尊の教えに説かれる、

(一)ものみな生命あり

(二)ひとみな心あり

(三)もちつもたれつの世界

に通じるもので、仏教の根本理念です。

つまり、私をはじめとして天地一切を活かさしむる「宇宙的生命の根源」です。

無量寿仏（はかり知れない無限の生命）

無量光仏（はかり知れない無限の光明）

の恩恵を自覚すると共に、この根本仏である阿弥陀如来に我が身と心を捧げつくし、「感謝の生活」をしてゆくことが本当の「念仏」であります。

そしてお十夜の「十」という数は、お十念の「十」にも通じるもので「満たされた数」を意味しています。月夜にお月さまが「まん

丸く」見える時のように、私達の心に念仏の功德が積まれてくると、明るく（智慧）温かな（慈悲）な心が満ち満ちて次第に円満な人格にさせて頂けるのです。

まるまるとまるめまるめよわが心

まんまるまるくまるくまんまる

（木喰五行）

○ 真実の供養

津軽の小さな寺に生まれた私は、幼い頃厳冬の早朝より起き、仏前に「ごはんと」「お茶」をあげている父の姿を思い出すことがあります。子供心にお仏器からたちのぼる湯気がおもしろく、なぜか印象的だったのでしょう。

「毎日続けていることですが、仏さまにお

給仕させて頂いておりますと、それが心からの喜びとなり、生きがいになってくるんですよ」

というお言葉を、今は亡き後藤真雄先生から頂いたことがあります。住職として日の浅い私は、この時ほど仏さまへの供養の心が足りない自分自身を恥しく思い、反省させられたことはありませんでした。

『父母恩重経』というお経に、

「生けるが如く仕えまつり、普く人を救わんと、慈悲のいとなみ勤むべし。これを以って真実の供養となす」

と説かれるように、「生きて在す如来さま」にお仕えする信心が大切であると教えているのです。

ここで「供養」という言葉について考えて

みると、本来は「供養資養」のことで「供給」と「資養」の意味をもつのです。

「供給」とは私達が仏さまに、お花・灯明・果物・お菓子などさまざまな品物をお供えすることです。

次の「資養」は、仏さまの側からの「おそだて」を意味し、

見えなくても お花を供えたい

食べなくても 美味を供えたい

聞こえなくても 話したい

見えざるものへの真心は美しい

とあるように、私が真心を供えているのではなく、仏さまが私達の真心を育ててくださっているのです、その真心によって私達は供えさせられていると受けとめるべきです。

よく考えると日頃から使い慣れているこの

「供養」という字義にも、このような奥深い教えのあることを私達は見逃してはならないと思います。

○ 貧女の一灯

夜明け前に目が覚め、うす暗い本堂でローソクに火をともすことがあります。はじめはボンヤリしている炎が次第に大きくなってくると、ほのぼのとした明るさの中で阿弥陀さまの御尊顔を拝することができます。

そんな時、いつとはなしに合掌し、お念仏が心の底から湧き出てくるのは不思議なものです。

仏前に捧げる灯明には「貧女の一灯は長者の万灯よりも尊い」という教えがあります。

釈尊が王舎城の東北にある靈鷲山におられ

た時のことである。その日、マガタ国王阿闍世王は、釈尊に沢山のごちそうを供養して帰途についた。そして大臣を呼んで、次の日に供養すべきことについて色々相談をもちかけたが、なかなかよい考えが浮かばない。あきらめかけていた頃に一人の大臣が、

「灯明を供養されてはいいかがでしょうか」と言上したので阿闍世王は早速、大臣に「麻油」を用意させ釈尊のもとへ贈り届けたという。

その頃この街に、大変身なりの貧しい一人の女乞食が住んでいた。この老婆の名はナンダといったが、彼女は街中の人々がわれもわれもと釈尊の所へ参り、また弟子たちに供養する様子を、言い知れぬ寂しさと、悲痛な思いでながめていた。

「ああ、私は何という宿福の薄い人間であらうか。せっかくこうして釈尊と同じところに住みながら、何ひとつとして供養を捧げることができない」

ナンダの心はそういう思いに満ちていた。たまたま阿闍世王の車が油を献供するために通り過ぎるのを見て、

「私もなんとか仏さまに油を供養したい」と思った。

ところがある日のこと、ナンダは一人の慈悲深い方から僅かのお金を恵まれるのです。小銭を手にしたナンダは胸をふるわせ、飛ぶようにして油屋に走りました。

油屋の主人は、この貧しい老婆を見て、
「食物を求めないで、どうして油が欲しいのですか。油は食べられませんよ」

と訝げに尋ねた。突然の質問にナンダは、

「いいえ、滅多に会えない仏さまにお会いできる時代に生まれて感謝しております。

私は貧しくて何も供養できませんが、心ばかりの一灯を仏さまに捧げたいのです」

と、はずかしそうに小声で答えた。

幸いにも彼女の気持ちを悟った油屋の主人は、その殊勝な志に深く感じるところがあり油を余分に分けてくれた。その時、ナンダはどんなに喜んだことだろう。天にも登るような歓喜にあふれて、ナンダは急ぎ足で精舎に詣で油をもってみ仏に捧げ、遥かにみ仏のお姿を拝し、

「私は今このように見すばらしい身分で、このとほしい一灯の灯しか供えることができません。これだけの油では半夜も、もた

ないかもしれません。しかしもしこの功德によつて、未来に智慧の明りを得ることができましたなら、私は必ずやその光明をもつて、一切の悩める衆生の苦闇を除くでありましょう」

と心に念じて一灯をともし、ナンダは満足げに街に向つて去つて行つた。

さてその夜、大量の油を灯した阿闍世王の灯火は一晩中燃えていたが、明方近くになると皆消えてしまった。しかし不思議にもその中に夜と少しも変わらずに赫々と照り輝いている一灯があつた。ちょうどこの日、当番にあつていた目連は、夜も明け放たれたので灯をおさめようと見廻つてみると、一灯だけは相も変わらず燃えているので、どうしたことかと思ひながら手をあげて何度となく消そうと

したが、どうしてもその火を消すことができなかった。

これを御覧になつていた釈尊は、近くに目連を呼び寄せられて、

「その灯はお前の力では到底消すことはできないであらう。もしお前が四大海水をそいで消そうとしても、なおその火は燃え続けるであらう。なぜなら、その火は一切の智慧の光明として、ナンダが捧げた尊い真心が燃えている」と論されたという。

この物語は、真心から生まれた供養こそが何よりも尊いと教えているのであり、釈尊はナンダの心からなる行為に対して、来世で「須弥灯光如来」となることを約束されたと伝えられています。

○ 念仏の灯をともし

私の寺では十夜会が近づくと、お檀家さんが「仏餉米」と「灯明料」を届ける習慣があります。最近では附届けの意味あいがこくなってきました。今でも重箱に新米をなみなみと詰め、その中に半紙に包んだ灯明料を入れて、

「ご前さん、初穂ですから仏さまにあげて下さい。今年もお世話になりましたよ」と言葉をそえるその姿に、阿弥陀さまに、ご先祖さまに、自然の恵みに対する、尊い感謝の心を拝ませて頂いております。

一本のローソクに火がともると、周囲を明るく温かく円満にしてゆきます。

それは、あの硬く冷たい蠟ろうが炎と生まれ変

わってゆくからです。

どんな人間でも心の中に「一本のローソク」をもっています。それは大・小・太・細・軟・硬とさまざまですが、肝心なのはそのローソクに火がともるかどうかという事です。

芯のないローソクでは燃えぬ

どんなに財産があっても

学識があっても

一本の信がなかったら

それが光には変らぬ

(中野善英)

どうかこの十夜会のありがたいご縁にまみえ、一切を生き活いかさしむる阿弥陀さまに感謝の念仏を捧げると共に、わが心に念仏の灯をともし続けてゆきたいものです。

油灯の人にしたしき十夜かな

(与謝蕪村)

△読者の便り▽

正村師の一文に感激!!

築^{つき}地^じ泰^{たい}賢^{けん}

「お彼岸に思う」と題された正村英明師の『浄土』の法話をありがたく聞く。心より感銘し、是非にと一筆を寄ささせて頂く。

文中に示されたひとつの歌、

何もかも我一人のためなりき

今日一日のいのちたふとし

高原憲先生の歌が聞こえる。

「お浄土はないのではない
見えないだけである」

そしてこれは、正村英明師のお声か。弟博之氏をなぐさめる昭寿氏の声が聞こえる、兄哲氏の、そして母上のお声が。再びまた高原先生の歌が聞こえる。

本願の船には乗れども煩惱

の船のともづなはなしかねても

私の心を揺さぶって、全身を離さない。そして正村師の示された一文がよい。

「最後まで人間の煩惱は尽きない。ともづなが離せないのが本当。でも、力尽きてともづなを放すれば同時に、願船は動き出して光明の世界へ」

この項を拝読するに当って、しばしばメガネの曇りを取りながら耳を傾けた事であります。
平成元年秋彼岸を終えて

日光庵 寿賢

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(18)—

木の
した
りゆう
隆
いち

年が明けて昭和二十五年になっても、我が家は去年の続きで何の変わりもなかった。三日は年始客があつて、不断より人の出入りが多かったが、それが過ぎるとまた元の親子三人と犬一匹の静かな生活に戻った。確かに表面上は何の変化もなかったが、私の受験が目睫の間に迫っていたので、何となく重苦しい空気が家中を支配していたのは否めない。

父も母も、そして私も、ただそれを口に出さなだけであった。一月の半ばに進学適性検査のテストが行われたが、結果は予想通り惨憺たるものであった。

もう二月に入っていたかと思う。ある朝、いつものように登校の途中尾島の家にと、

「帰りにでも寄ってくれ。渡したいものがあるんや」

と言われた。その頃、関西学院大学の推薦入学を取りつけた尾島は殆ど学校に出ておらず、三原と神戸の間を行ったり来たりしていた。入学手続きのためとか下宿探しのためとか、大義名分を振りかざせば、尾島はその年の進学第一号生だったから、学校側も欠席を強く咎め立てすることはできなかった。

バジャマの肩にだらしなく半纏を引っかけた姿を見て、

「今日も休むんか」

と私が訊くと、

「うん。学校へ行ってもおもしろいことあらへんしな。今週いっぱい休むことにしてあるんや」

と、尾島は答えた。そして大きな欠伸^{あくび}を一つすると、

「ほな、またあとで……。今朝もよく冷えたなあ」

と、取ってつけたように言って、そそくさと家の中に引っ込んでしまった。

今週いっぱい欠席届を出しているのか、それとも尾島が勝手にずる休みを決め込んでい

るのか、その辺のところはもう一つはつきりしなかったが、私にはどうでもよいことであつた。実際、尾島は学校へ行っても面白いことは一つもないだろうと私は思った。彼には心を許して話し合える友人がいなかったからである。先天的なものなのか。尾島には妙に依怙地なところがあつて、郷に入つては郷に従えということができず、頑なに関西弁に固執するところなかに、それがよく表れていた。当時の三原は瀬戸内でも有数の工業地帯で、いわゆる他所者も多く、近隣の町村に比べれば割合自由な土地柄のはずであつたが、排他的なことにかけてはなんら遜色がなかった。尾島のように物心ついてから神戸という都会で育つた男にすれば、三原は決して住み心地のよいところではなかったに違いない。いつだったか、なぜ広島弁を覚えななんだと聞くと、此処は永く住むとこじやない。だからそんな土地の言葉を覚えるのは徒勞に等しい。僕にはもっと覚えなきゃならないことが山ほどある、と尾島は答えた。土着の奴には嫌われたが、私はそんな尾島の生き方が嫌いではなかった。生来私に欠けている頑固な部分を持つている尾島が羨しくもあつたのである。

学校から帰つて、私は虎徹を連れて尾島を訪ねた。知らぬ間に日は随分永くなつていた。いつの間にか季節の微妙な移り変わりに無頓着になつていた自分を見出だして、こんなことでは俳句を作つてますなんて鳥潑がましくて言えないじやないかと、私は慄然とした。浪人を前提に、楽な気持ちで受験に臨もうとしている私だったが、やはり大学受験という現実は、心のどこかにかなりの比重で重くのしかかつていたのである。日脚伸ぶ――

と呟いてみたところで後が続かなかった。尾島が出てくるまで、私は玉垣にもたれて海を見ていた。心なしか霞を帯びた海はもう冬の景色ではなく、どことなく春の近いことを予感させた。春近し、春隣、春めく……と、次々にめまぐるしく季語が頭をよぎったが、どれもこれも素通りするだけで、一句も物にならなかった。

「やあ、お待ちどおさん、上がらへん？」

尾島は朝と同じいでたちで出て来て言った。

「いや、こいつがいるから」

「虎徹離してやったらどや。その辺で遊んでるのとちやうか」

「そううまくはいかん。外へ出ると分かるといそいそ繋がれるくせに、一旦離れると、なかなか捕まらんのよ」

「食い物で釣ってもあかんか？ 諸ならあるよ。そや、虎徹にご馳走したろ」

尾島は家に入ると、すぐ箆に入れた蒸し^{ゆか}諸を持って現れ、大ぶりなのを一本ひょいと掴むと、

「ほら、食え！」

と、虎徹の鼻先に突きつけた。諸の匂いに釣られて虎徹は二、三度尻尾を振ったが、尾島の仕種に反撥するように尻尾を振るのをやめて、フンと横を向いた。しかし、ちらちら横目で諸を見ては、私の顔を振り仰いだ。

「諸嫌いなんか？ 食えよ」

「諸は好物よ。でもそんなやり方じゃ犬は食わん。小分けにして掌に乗せてやらんと」
「へえ、諸一つ食わずにも面倒な手続きがあるんやね」

「手続きというほどのもんじゃ無いが、まあ手順というか……、こうすれば食い物にありつけるという最底の基本は守らせないと」

「虎徹、お前も苦労してるんやね、可哀そうに」

そう言いながら、尾島は私に言われた通り諸を小分けにすると掌に乗せて、

「ほら、お食べ」

と、前よりは少しやさしく言った。何事にも一家言持つ尾島にしては、いつになく素直な態度だった。

「虎徹、お坐り！ お坐りせんか。それからオッチャンにお手！」

いつ誰が言い出したのか、尾島はその姓に引っかけたオッチャンと呼ばれていた。それには多少揶揄の意味合いも含まれていたが、老成した感じのする尾島にはふさわしい渾名あだなであった。オッチャンにお手！と言われて、虎徹は戸惑っていた。

「オッチャン言うたかて誰のことか分からへんがな。わてや、わてのことやがな」

鎖を離してやると、虎徹は尾島のの前に行って坐り渋々お手をしたが、諸は見ているだけで、私が「よし」と言うまで口にしようとはしなかった。

「偉いもんやねえ、涎垂らし垂らしでも我慢するんやねえ。これだけ駄けるのに時間かかったやろ」

「別にこれという躰はしてないよ。自分で覚えにゃならんことがいっぱいあるのに、人間があれこれ押しつけて無理矢理させるのは可哀そうだもん。そう思わないか」

「そりゃそうや。君みたいなのを真の愛犬家言うんやろね。虎徹、お前は幸せもんや」
真の愛犬家と言われて、私は照れた。

「それほどじゃないがね。あんまり勝手させとくんて、こいつ自分を犬だと思っていないらしいんだよ」

尾島の掌から藪を食べ終えると、虎徹はさっさと神殿の裏側へ駆けて行った。何をしに駆け出したのか私には分かっていたが、尾島には言わなかった。境内の日向を横切る時、全身の毛が金色に光った。

「金毛九尾の狐って、あんな色してたんやろなあ」

「そんな。化け物みたいに言わんでくれ」

私の言うのには取り合わず、

「手入れが大変やろ」

と尾島は言った。

「朝晩ブラシかけるだけだよ」

ブラシと言えば聞こえがいいが、当時犬用のブラシなどという洒落た物はなく、台所用の束子たわしで代用していた。

「束子でなあ……。いいかも知れんね、虎徹の体のためには。この間新聞に出てたやろ。」

何、とか裸貫いうおっさんの記事、東子で全身こするいうの」

「全身顔じゃあ、ワッハッハッハってやつか」

「それぞれ。人間の体にいいのなら、犬にかけていいはずや。もっともやれと言われても僕はやらんがね」

虎徹の上前をはねた蕎麦を食いながら三十分ほど他愛ない話をして、私は尾島と別れた。渡したい物があるというから出掛けて来たが、結局尾島は何も呉れなかった。あれは単なる口実で、話がしたかっただけのことだろうと私は思った。帰りしなに、

「関学に決まってよかったなあ」

と言うと、

「いろいろごたついたけど、やっと片がついた。祖父^{じい}さんが、神主の孫が何で耶蘇の学校へ行かにならんのだとうるさくてね」

と尾島は苦笑した。

三月一日、私は三原高校を卒業した。そしてその日の夕方、受験のために満員の急行列車「つくし」に乗って上京した。

○『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』十一月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20 cm × 30 cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30 cm × 50 cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^ぐ の 生涯^(十二)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ} 浦^{うら} 行^{ぎょう} 真^{しん}

続・福知山法鷲寺のころ

法鷲寺^{ほうじうじ}の住職時代、岩井智海は養子縁組み

をした。それがのちに、広島文理科大学（現
広島大学）の教授となった岩井龍海である。

当時、智海は三十代の半ばだったが、まだ
妻はめとっていなかった。

このしばらくあとに彼は——法鷲寺の住職
を辞してからだが、結婚することになるの
であるが、結婚すれば当然、実子の誕生を予想
するのが通常であろう。

じっさいには岩井智海は、子宝に恵まれな
かった人であるが、しかしそれを結婚まえに
想定することは、不自然というものである。
だのに、養子縁組みをしたのは、どうい

ことであったのか。

そのころ彼は、結婚を考えていなかったのであらうか。

いや、いずれ結婚するにしても、法灯は、実子とか実子でないとかの如何にかかわらず、それにふさわしい弟子に継がせるべきだという、伝統的な考え方を頑なに持っていたのであらうか。

このあたりは類推するしかながのだが、その類推すら、今日ではいたって難事である。ひよっとすると筆者は、あまりにも現代の感覚で、ことを考えすぎているのかもしれない。

少なくとも岩井智海は、親鸞を開祖とする真宗は別として、僧侶は独身が建て前であった時代を知っている人であった。それに彼自身、福岡の成道寺に境譽見明の弟子となるとき、その養子となっているのだ。

かてて加えて、筆者はこの伝記を書きすめてゆくうち、とくに明治期において、弟子を養子とするケースの意外と多いことを知った。

それらを考え合わせるとき、養子を迎えたことを、そうひねくり回して考えるにも及ばないかもしれない。

彼が、龍海を迎えたのはどういう経緯からだったのであらうか。

龍海は幼名を庄松といい、愛知県海部郡佐屋町の出身で、滝川庄左衛門とえいの間に生まれた七人きょうだいの三男であった。

すぐ上の兄・秀雅のちに僧籍に入ったことも察しられるように、この滝川一族は、仏縁に浅からぬものがあつたようである。

滝川愍常みんじょうという人があり、この人物が兵庫県水上郡柏原町かしはらまちの西楽寺に住職をしており、甥の滝川学常を弟子にとつていた。ちよつと

ややこしいが、秀雅はそのまた学常の甥なのである。

このあたりから、龍海が智海の養子となる機縁がほぐれてくる。

同じ門中であつた智海は、この学常といつてウマが合つたらしい。おそらく年齢も、近かつたのではないか。おたがい三十代という親近と交際の中から、龍海養子の一件が生まれてきたものとみて、おそらく間違いはないだろう。

もっとも学常は当時まだ、西楽寺の「部屋住み」の身分であつた。師匠の愍常は幕末からすでに西楽寺の住職であり、在職は四十年の長きにわたつたから、たぶん愍常の指図によると思われるが、途中で同じ氷上郡春日町の棚原にある浄円寺の住職となっている。しかしそれは明治三十三年のことで、これから述べるように、智海が法鷲寺を辞して二年後

のことにぞくする。

だが、龍海は幼いころすでに愛知からはるばる福知山へきていたらしい。法鷲寺の先代・嵐演激が、

『龍海師は法鷲寺の小僧時代、惇明小学校に通学し、学業なるや、後世、広島高等師範学校教授になられた秀才であつた。福知山には同級生の方がいて、子供の頃の龍海さんの逸話をよく語ってくれたが、今は皆亡き人々となつた』

（嵐演激著「法鷲寺物語」）

と、書いているのでも、それは明らかであろう。これは龍海の兄・秀雅が、氷上郡柏原の西楽寺にきたのよりも数年早い。秀雅が（注）^{（注）}学常の弟子となつたのは、愍常が遷化して、棚原の浄円寺から西楽寺の住職に転じた明治

三十六年のことである。

嵐演激の指摘するように、龍海は旧制第一高等学校から東京帝国大学（現東京大学）にすすみ、社会学を専攻した秀才であった。しばらく大正大学で講壇に立ったあと、広島高等師範学校に移った。同校が昇格して文理科大学になったのちも、教授として講義をつづけたことはいうまでもない。この広島文理科大学が現在の広島大学である。

なお龍海は昭和十七年五月に岩井智海が示寂するや、定年をまたずに広島文理大を辞し、堺の旭蓮社大阿弥陀経寺に帰ったが、その二年後の昭和十九年七月十日、六十一歳で遷化した。

堺へ

明治三十一年七月、岩井智海は法鷲寺から、

大阪府堺市の旭蓮社大阿弥陀経寺へ、転ずることになる。

法鷲寺も北丹では屈指の名刹だが、大阿弥陀経寺は勅願寺（注3）であり、もうひとつ格のちがう名利として、全国にその名を知られた寺である。

創建も古い。後醍醐天皇の元徳二年（二三〇）である。

開山は「菩薩」の称号を光明天皇から授けられた澄円で、はじめ比叡山に登って天台を学び、ついで京の建仁寺で禅機に接し、転じて浄土宗義を学んだという華麗な学歴の持ち主だ。

それだけではない。

正中二年（一三三五）、三十五歳のときには中国（当時は元の時代）に留学し、廬山（ろさん）の東林寺に伝わる、白蓮社（びやくれんしゃ）の名で知られる浄土宗慧遠（えいげん）派の法脈をついで、嘉暦四年（一三三九）に帰

国した、現代の言葉でいえばモダンな新知識なのであった。澄円はその廬山の精舎を模して泉州の堺ノ浜に一寺を建立し、名も白蓮社にちなんで、「本朝廬山旭蓮社」と名づけた。これが日本における蓮社号の始まりだが、そういう由緒を持つのが大阿弥陀經寺なのである。

そういうところの住職就任を請われて智海も、法鷲寺の復興はおおむね完成に近づいたものの、いまだ完了にはいたっておらず、ずいぶん迷ったことであろう。しかし結局、引き受けた。

それにしても彼は、当時まだ三十六歳である。働き盛りには相違ないが、歴史のある寺を引き受けるには、少し早いような気がしないでもない。

なぜ彼に白羽の矢が立ったのであろうか。もちろん智海の人柄と才腕を見込んでのこ

とには違いないが、じつはその三十六歳という若さに、堺側の思惑があったようなのだ。彼の弟子で、大阿弥陀經寺の現住職である山田智旭によれば、

『私が師匠から聞いたところによると、明治の初期のことですが、堺に県が置かれたことがあります。明治十年から二十六年にいたる十七年間で、そのときに行政の庁舎に寺院が徴用されました、真宗の北御堂が県庁、この旭蓮社が裁判所になったんです。

いったん徴用となると、庫裡や庭園はむろんこと、本堂までが取り上げられて、阿弥陀仏の本願による救済を説く浄園が、たちまち変じて罪人を罰する裁きの庭になりましたね。

これで寺がすっかり荒れてしまった。

そして二十六年になってようやく裁判所が車之町に移ることになり、旭蓮社が返還されたんです。しかし、いま言ったとおり荒れておりますから、整備しないことにはどうにもならない。整備というよりは再興ですね、むしろ。

それで当時の住職で三十六世三戸皆誓（賢遵）上人、この方が復興計画を立てられたのですけれども、何分にも老齢なうえに、病にかかってしまわれた。このままでは大阿弥陀經寺の復興は成らずに終わってしまうというので、それが師匠にたいする、上人をはじめ檀家一同の熱烈な招待になったのだということでした』

（山田智旭談話）

これはいかにも有りうることであった。というのがその年の四月、堂宇がすっかり

流失してさしも困難と見られた法鷲寺の復興にはば成功したというので、智海は時の管長野上運海大僧正から、賞を受けているのである。

旭蓮社の復興に頭を痛めていた檀信徒たちは恐らくそのことを、病床の賢遵和尚か、あるいは組内の和尚からでも聞きこんだに違いない。そしてまたその折りに、例の従軍一件も耳にして智海のバイタリティに着目し、旭蓮社の復興を託する決意をかためたのではないか。

ともあれそうした経緯をへて、智海は大阿弥陀經寺の第三十七世住職となることを承諾した。そして旭蓮社の再興について、彼の小伝は、

『師は三戸皆誓上人の宿願達成の爲特に大阪府知事の許可を得、府一円に渉り浄

財淨物の寄進を仰ぎ、旭蓮社再興を熱心に計り、破衣短鞋東奔西走、刻苦精勵の結果明治卅五年本堂の修繕及庫裡の新築等を完成、輪奐遂に旧觀に復せしめ、信濃の善光寺大本願久我誓円尼公を特請し一条公二条公両母堂の隨喜を得て、旭蓮社復興慶讃法要を執行し得たり。更に師は檀信徒の教化指導に尽瘁し、帰仰を一身に集められしはもとよりの事なり』

(岩井智海著「道しるべ」)

と記している。ちなみに「破衣短鞋」とは、
「衣は破れ草鞋はちびて短くなる」の意であり、「輪奐」とは「建築物の壮大で立派なさま」の謂いだが、それを、淨財を集めることから始めて、足かけ五年で成しとげたのである。おそらく智海は、死にもの狂いであったろう。それにしても大阿弥陀經寺の賢遵和尚

にしても檀信徒たちにしても、うってつけの人物を見つけたものである。

この大阿弥陀經寺にきてからだと思われるが、智海は結婚した。目下のところその時期について見当のつかないのがもどかしいのだが、筆者としては、堂宇の修復ならびに新築の成った後のことではないかと思いたい。むしろ、根拠はない。旭蓮社に晋董した最大の目的を果たし、ほっと肩の荷を降ろしたその安堵感、安定感は、結婚を考えるにふさわしいと、単に想像したにすぎない。

ただ後述するように、結婚した婦人の妹が旭蓮社に訪ねてきた年が明治四十四年だったという証言があるので、結婚がそれ以前だったことは疑うべくもない。

その婦人は清水富といった。岐阜県大垣市に住む清水直哉・かね夫婦の間に生まれた三男五女の長女である。清水家には、明治二十

四年十月二十八日に起きた濃尾大地震のさいに、米蔵をあけて粥の炊き出しを行ない、被災者からたいへん喜ばれたという話が伝えられていたというから、かなりの素封家であったことが察しられる。濃尾大地震は倒壊家屋一四万二〇〇〇戸、死者七〇〇〇人をもたらし、た大きなものであった。

これらの消息は、岩井龍海の長男龍也(龍也)の山田智旭あて書簡によったのだが、それには、

——(富は)大僧正とは京都で知り合いになつたということ、遊学入信か。

と記されている。

興味深いのは、龍海も富の妹雪ゆきと結婚していることである。これでゆくと、龍海・雪は智海の夫婦養子でありながら、智海からみた血縁関係では義弟・義妹だったことになる。

もっとも雪は三女で、八人きょうだいの中では六番目であり、富との年齢差は相当ひらいていたという。

旭蓮社に訪ねてきた妹というのはこの雪のことで、彼女は今も福岡の龍也邸に健在だが、すでに九十歳の坂を越し、記憶は茫々ぼろぼろとした彼方にある。ただその堺を訪れたとき、姉の富が、

——旭蓮社を切り廻して、立派に守っておられた。

という消息がもたらされたのみであった。富は雪と違って、短命な生涯をたどった。大正七年に心臓の病いで、四十三歳を一期に、この世を去っている。

ついでに、といつては申しわけないが、岩井智海の後妻についても記しておきたい。

彼女は松浦かつといった。大阪教区天満組の赤門西福寺二十一世住職松浦春壽の姉である。

澄蒼春壽は浄土宗伝道会や四恩報恩会を起こして布教界に新機軸を投じるとともに、大阪のスラム街・釜崎に四恩学園を創設し、社会事業の実践的研究に献身的な努力をほらつた。その一方で宗政面でも、当時の宗政の政治結社ともいうべき懇話会や扶宗会の幹事をつとめるなど多彩な活動で知られ、終生、布教と社会事業と宗政に尽力した人物である。^(注6)かつはたぶん、この弟を通じて、智海を知つたと思われる。

智海の示寂二年前に刊行された『道しるべ』には、『五重授戒結縁寺院名及其年月日』が収められているが、それによると赤門西福寺の名は、大正二年五月一日を初日とするもの、同五年五月九日を初日とするもの、同十三年

五月七日を初日とするもの、の計三回が記録されている。

この中の前二回のどちらかで、かつは智海の説法を聴聞し、魅せられたのではないか。しかしそうした五重相伝ばかりではなく、智海は折りにふれて西福寺に松浦春壽を訪ねていたそうであるから、かつが智海に対面する機会はかなりあったと思われる。

とはいえ彼には当時、富夫人が健在であつたから、彼女は多分、距離を置いて憧憬の眼差しを送っていたにすぎなかつたであらう。

が、富の死で、環境は一変する。

西福寺は先の大戦末期の戦災でほとんどの記録類を灰燼に帰し、加えて当時を知る人も今ではすべて鬼籍の人となつていたので、抛るべき確かな証拠も証言もないが、先代の二十三世住職松浦宏泰によれば、かつは名のごとく勝負な人だつたそうだから、おそらく弟

をつついて結婚の意志を明確に相手に伝えるくらしいのことはしていたであろう。もしかすると、ときには旭蓮社に押しかけて、女氣のない台所に立ったりしたかもしれない。これは筆者の想像である。

それを智海が、はなはだ迷惑がったかどうか、これはわからない。しかし満更でもなかったのではないか、という氣もする。まもなく結婚が成立しているからである。

その時期を、岩井龍也は前記の書簡の中で、大正九年に入ってからではなかったかと、推定している。これは富の一周忌が八年十月に当たることからの類推であろう。

しかしかつは病弱であった。

山田智旭は養母のハナが後年、『天氣のいい日など、大僧正がかつさんに、「日光欲をしないさい。脊髄の病には太陽の光を浴びるのが一ばんいいのだから」と言っているのを、

耳にしたことがある』と思ひ出を語るのを聞いた記憶があるという。してみるとかつは、脊髄カリエスでも病んでいたのであらうか。この話は松浦家には伝わっていない。

ともあれ、かつは大正十二年八月二十四日にみまかった。結婚してわずか三年たらず、享年四十五歳であった。

智海は、富には、

愛蓮院正譽慈徳妙富大姉

そして、かつには、

義操院信譽智光恵明大姉

の法号を授けて、薄縁だったこの二人の妻たちの菩提を、弔ったことだった。(つづく)

(注1) 滝川氏関係の記述については、兵庫教

区丹波組の本来寺住職・滝川殿城師(前西楽寺住職)の談話と、同師ならびに現西楽寺住職・滝川秀行師の共著になる「西楽寺読本」に拠った。

(注2)

滝川学常師は師・愍常師の遷化で浄円寺から西楽寺に帰ったが、そのわずか五ヵ月後に、あたかも師の跡を追うかのごとく遷化された。愛知から来たばかりで残されたまだ年少の秀雅師は、学常師の弟弟子である大阪教区大江組・光明寺の滝川秀音師(後出)が引取り、養育した。この秀音師がのちに岩井智海が知恩院門跡となったとき常侍局長として岩井を補佐した人である。

(注3)

康永元年(一三四二)に悪疫が大流行したとき、澄円は時の光明天皇の勅命を受け、大般若経を転読して閉塞を祈願した。その効験によって澄円は「菩薩」の称号をもらったのだが、同時に倫旨により旭蓮社にも「勸願所大阿弥陀経寺」の称号が下賜されたのだった。白蓮社は中国五世紀初頭の東晋時代に慧遠が廬山に結成した念仏結社。念仏修行も一人では怠りがちになりやすい

(注4)

ので、多くの同志が一ヵ所に集まり、

ともに念仏往生をしようというのが目的。東晋の名士名僧ら百二十三人が集集したという。たまたま池に白の蓮華が咲いたので、「白蓮社」と名づけたとされているが、実際には宋代に念仏結社が盛んに行なわれるようになって、時代をさかのぼってつけられた名であろうという説が有力である。浄土宗では能化僧の法名に蓮社号を冠するが、これは念仏結社の始祖・慧遠を景慕してのことである。

(注5)

岩井龍也は龍海の長男で、大阿弥陀経寺第三十九世。東京大学教育学部を卒業後、国立教育研究所などをへて九州大学教授。定年で辞し現在は福岡で短期大学学長。

(注6)

松浦春壽(一八八一―一九二九)。この略歴は「浄土宗大辞典・第三巻」に所載の記事から適記した。

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをかためるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十五巻 十一月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成元年十月二十五日 印刷

平成元年十一月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

◇◇ 平成二年用新版 ◇◇

浄土宝暦

発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
年末年始の好便な檀信徒用施本として、広くおすすめいた
します。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ブ以上 特価60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

.....お申込み.....

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187